曽根　ゆうき（8 歳・男子）

＜ゆうきくんのこと＞

ゆうきくんにはたくさんの兄弟がいます。けれども父親はあまり働こうという気持ちがないため、母親が子育てをしながら一人で頑張って働いていたようです。兄弟は手のかかる子どもたちだったので、母親は忙しさに追われ、つい手が出てしまうこともあったそうです。また以前には母親自身も父親から暴力を受けていたこともありました。そうした中、母親は弟の出産を迎えて、これ以上肉体的にも精神的にも頑張れない状態に陥ってしまったため、ゆうきくんを乳児院に預かってもらうことにしました。

6 年前の作文集では、母親は半年間ほどは月に 3，4 回面会に来て 1 時間程度ゆうきくんに会っていましたが、次第に月 1 回、あるいは全く面会に来ない月も増えてきました。一方でゆうきくんは乳児院での生活に慣れてきて、職員さんに見守られながら少しずつ成長する様子が丁寧に描かれています。

『ゆうきくんのその後』

施設職員

小学校に入学する年の 3 月に家庭引き取りということで退所しました。家庭は、父が就労し経済的には安定してきていました。しかし在宅の兄姉は毎日のように学校に遅刻して登校していて、家庭状況はけっして安定しているわけではありませんでした。そのため定期的に電話連絡をして様子を聞き、必要に応じて支援していくことにしました。

退所後、小学校に入学し、当初は緊張していましたが、学校にもしっかり通い、元気に過ごしていました。3 ヶ月程経った頃、突然、施設に母親、ゆうき君、男性の 3 人が来所しました。そのとき近況を聞きました。母親は収入が少ないことから来るストレスのため離婚したこと、母親自身の体調も良くないため仕事を辞め、しばらくは手当で生活しているとの話でした。一緒に来ていた男性とは離婚後交際を始めたようでした。子どもたちとの関係も良く、将来的には結婚して男性の実家で生活しようと考えていると母親は話してくれました。小学校 5 年生の兄と 4 年生の姉は不登校になっているようでしたが、ゆうき君は毎日楽しんで学校に登校していました。

その後のゆうき君や家庭状況は不明です。家族とともに自宅で暮らせる幸せを感じながら、学校に毎日通い、楽しい生活を送ってくれていることを願っています。

金田　美咲（８歳・女児）

＜美咲ちゃんのこと＞

美咲ちゃんは生後 36 日で乳児院に入りました。未婚の母親は妊娠中も薬物を服用し続け、「死ね」と言いながらお腹を叩いたりするといった『胎児虐待』をしていました。そのため医師から児童相談所に連絡があり、乳児院に入所しました。

6 年前の作文では、乳児院で暮らしている美咲ちゃんの様子を職員の方がていねいに書いてくれました。乳児院にやってきた当初は視線が合わなかったり、抱きにくかったりとちょっと気になる子でしたが、だんだんと可愛らしい笑顔をたくさん見せてくれるようになりました。入所後は、両親で面会に来てくれるようになりました。生後 8 か月頃から両親のもとに帰省するようになり、両親も美咲ちゃんの成長を楽しみにしていました。美咲ちゃんは成長とともにどんどん動き回れるようになり、ときにはひどくぐずったりするようになりました。そんな美咲ちゃんの対応に両親は困るようになりました。乳児院では美咲ちゃんが両親と一緒に生活できるようになることを考えていましたが、両親とも精神的な病気を抱えているため、心配なこともたくさんありました。そのため美咲ちゃんは乳児院から児童養護施設に措置変更になりました。児童養護施設に入所後は外泊を繰り返して、家庭で暮らす練習を重ね、家庭に戻っていきました。

そして 3 年前の作文集では、美咲ちゃんが家庭に戻り、母親の通っていた保育園に通園していること、お友達とうまく一緒に遊べないときがあること、自分の気持ちが伝わらないと時々パニックになることなどが書かれていました。乳児院の職員さんと母親が電話で話すたびにちょっと手がかかってたいへんなときもあるけれど、元気に暮らしている様子を伝えてくれました。

『美咲ちゃんのお家を訪ねて』

職員　山本　さやか

美咲ちゃんは、小学２年生になりました。昨年、七五三の祝いを神社ですませた帰りに“きれいな着物”姿で乳児院を訪ねてくれました。美咲ちゃんも大きくなっていましたが、お父さんのうしろに隠れているのは以前と変わりませんでした。「美咲ちゃん！こんにちは！保育園たのしい？」と聞くと顔だけだして「ウン」とうなずく。お母さんは薬の副作用でずいぶん体格がよくなっていました。お父さんは、青白い顔をして精気のない姿で玄関に立っていました。

美咲ちゃんは家庭に戻ったので、両親に「今度お訪ねしてもいいですか」と尋ねると「どうぞ来て下さい」と答えていただけました。

早速、美咲ちゃんのお家を訪ねました。以前は田園風景が広がっていた地域に新しく住宅が建ち並んでいる所に、美咲ちゃんの家はありました。家の周りには、まだ田んぼや畑が残

っている地域でした。お母さんが育った家を改修したと話されていたのを思い出しました。改修した時に外壁を遠くからも目立つ色に塗り替えたので、すぐに見つかりました。玄関を開けると大きな 2 頭のラブラドル犬が出迎えてくれました。美咲ちゃんは、以前会った時と同じように、お父さんの後ろに隠れてしまいました。顔を見せてくれるまでに少々時間がかかりました。「最近は、保育園でも、お友だちができてよく遊んでいます」とお母さん。「私ね、今、もう薬飲んでないんですよ。お医者さんが、もう薬飲まなくていいでしょうって」とお母さんは自分のことをちょっとうれしそうに言いました。そのせいか、お母さんは表情が明るく感じられました。お父さんも以前会った時にくらべ健康そうな顔になっていました。

家で見せていただいた小学校の入学式の写真に、美咲ちゃんは和服を着ておさまっていました。「美咲ちゃん、先生たちに小さいとき、大切に育ててもらったのよ。おぼえてる？」とお母さんが聞くと、お父さんの横に出てきて、首を横に振ってみせました。お母さんは「犬たちとよく遊んでるんですよ。それに最近では友達の家に遊びに行ったりすることもできるようになりました」と話される。「両親の愛情いっぱいもらって大きくなってね。また顔みせてね」と言って、私は暖かい気持ちに包まれながら帰路につきました。

＜訪問して思ったこと＞

精神的な病いのために、薬の副作用、症状の波などがあり、入退院をくりかえしていた両親でしたが、乳児院入所前に心配されていた“胎児虐待”はなく、出産後も虐待をしてしまうという不安は一度も感じませんでした。それよりも子どもを愛しく思い、面会をかさね、優しくお乳を飲ませていた姿を思い出します。両親の気持に寄り添い、時間制限をせず、夜でも面会を認めたり、外泊した時には、夜中でも困ったら連れて帰院するようにしたり。職員には大変な負担でした。両親は少しづつ回復されていき、乳児院退院後、児童養護施設に措置変更になり、家庭への外泊をくりかえし、家庭に戻ることになりました。家庭に戻った後は、地域の民生委員、主任児童委員、アパートの大家さん、保健師さんなど多くの方々に見守られ、今日を迎えたのだと思います。これからも地域の方々の見守りの中で、美咲ちゃん家族は生活していくのだと思います。お母さんの育った地域ですから周りには知っている方が多いようです。保育園の先生方の中にもお母さんを知っておられる方がいるようです。そういった環境のなかで、美咲ちゃんも育っていけると思います。

伊予田　駿（９歳・男児）

＜俊君のこと＞

駿君は、生後 61 日目にネグレクトとして、児童相談所に一時保護されました。母親は 18 歳でした。母親自身も祖父からの虐待を受けて育ち、中学卒業後に家に寄りつかなくなってしまいました。また、父親は定職もなく住所も定まらないような人でした。母親自身、駿君を育てたい気持ちを持っていたのですが、一方で駿君を放置したまま、出歩くなどのネグレクトが認められたため、乳児院に入所となりました。その後、乳児院から児童養護施設に措置変更になりました。俊君には姉がいて、姉と同じ児童養護施設へ入所しました。母親や祖母が面会に来てくれます。けれども母親は駿君の下に子どもが 2 人できたために、駿君を引き取ることができず、現在も施設で生活をしています。

3 年前の作文集では、俊君が近隣の児童養護施設に移り、5 歳になって元気に幼稚園に通う様子、乳児院に時々遊びに来て職員さんのお手伝いをする姿やその時のやり取りについて描かれています。

『大きくなったら』

元職員　村中　和夫

「僕ね、３年生になったよ。７月にね、サッカー少年団にはいったよ。楽しいよ。練習はきついよ。でもね、大きくなったらね、サッカー選手になりたいな」

「そうか、サッカー選手になれるといいね。練習つらくてもガンバってね。応援しているよ。たのしみにしてるよ」

「お家の人、面会に来てるかな？」「来てるよ、おばあちゃんがね」「お盆やお正月、家に帰れるかな？」「帰れない」「そうなの…　勉強はしてるかい？」「うん」「友だちたくさんいる？」「うん、いるよ。いっしょにサッカーしたりして遊んでいるよ」

彼は、まる顔の笑顔をふりまく少年になっています。「これあげる」と、キャンプに行ったときのお土産のクッキーをさし出しました。「いいよ、駿君が食べたらいいよ」「いいよ、いいよ、あげるよ、食べて」と手渡してくれ、「ありがとうね」と言ってる間に、運動場の方へ走って消えました。自分で食べればよいのにと思いながら、私はいただきました。

乳児院で育った姉（小学５年生）と駿君は同じ児童養護施設の中舎制のホームに措置変更になり、生活することになりました。その後、５歳になる妹が家庭から施設に来て、三姉弟妹になりました。まだ家庭には弟がいます。母親は再婚したという話も聞いています。ときどき祖父母が面会に来ていましたが、以前ほど来ているわけではありませんでした。そして昨年、祖父が亡くなりました。子どもたちと母親をつなぐ役割は祖母だけとなりました。

駿君は、頭の回転が幼児のときから速かった子です。私は俊君が幼い頃から周りの人との

力関係を敏感に感じとっての言動がとても気になります。「クッキー」をくれたこともそれではないでしょうか。乳児院から児童養護施設に移行していった時の担当職員は１年で退職しました。抱えてくれる職員がおらず、愛着関係が築けなかったのではないでしょうか。姉は愛着関係が築けた保育士がいたので、落ちつきを感じます。そして頭の回転がよい駿君には、学習支援も大切だと思います。せめて固定した学生ボランティアとの落ちついた学習時間が保障できたらよいと思ってます。１対１の職員との愛着関係をどう築いていくのか、駿君が小学校高学年、中学校、高校と成長していくことと、反抗期をどうきりぬけて行くかが、彼の社会的自立支援にも影響するように思います。

木村　舞（中３・女子）

＜舞さんのこと＞

舞さんは関西地方の病院で生まれました。生まれたとき舞さんは未熟児であったため、他の病院へ転院となりました。その後、実母と連絡が取れなくなったため、母方の祖母が舞さんを引き取りました。けれども祖母も舞さんを育てられなくなり、乳児院に入所しました。そして児童養護施設に措置変更となりました。2 歳 3 ヶ月の時、里親さんに出会い、里親委託となりました。しかし預けられて半年が過ぎた頃、保育所から「1 ヶ月前からこぶやアザ、内出血などがあり虐待の疑いがある」と児童相談所に通告がありました。児童相談所が調査をすると、里母からの虐待が確認されました。里母は「我慢できなくてカーッとなってしまうことがあり、手が出ることもある」と話しました。里親さんとの生活は 1 年もたたずに終わり、舞さんは再び施設で暮らすことになりました。

6 年前の作文集では舞さんは、里親との生活について、里父は優しかったが、里母と喧嘩をして出て行ってしまったこと、里母は舞さんが食事を食べるのが遅かったり、玩具を片付けなかったりすると、怒ったり、髪を引っ張ったりするため、好きではなかったことを素直に書いていました。

児童養護施設での舞さんは誰にでも甘え、自分を見てほしい、認めてほしいという気持ちが強く、マイペースなところがあります。3 年前の作文集では、新しい里親さんと出会い、遊びに連れて行ってもらったことなどが書かれています。

『将来は、介護の仕事がしたい』

職員　神谷　誠

ファミリーレストランで舞ちゃんと昼食をしながら話しました。夏休みが終わった９月の初めでした。舞ちゃんは、夏休みに多くの子どもたちが帰省したり、里親さん宅へ出かけたりして残っていた数人の子どもたちのなかの一人でした。そのとき舞ちゃんに「今度、お昼ごはん食べに行こうか」と声をかけると「うん」と答えました。その約束を実行に移したということです。

舞ちゃんは、中学３年生になっていました。クラブ活動の卓球を続けていました。勉強はあまり好きでないことを話した後、「私ね、将来は介護の仕事がしたいの。だから働きながら勉強できる定時制高校へ行きたい」と言いました。「そうか、舞ちゃん、それなら、高校卒業して、介護福祉士の資格をとる大学か、専門学校を目指さなくてはね。だから定時制高校入学目指して頑張らないとね」と言うと「うん」とうなづく。「里親さんの家には行っているのかい？」と尋ねると、「最近は、行ってない。里親さん、ボランティア活動が忙しくなって、面会も外泊もほとんどなくなった。それで今年から、また新しい里親さんの家に行くことになった。関西の人で、おもしろい人で、楽しいよ。台所仕事を手伝ったりして、お

母さんに甘えてるみたい。一緒に笑ったりできるよ。前の里親さんも、今の里親さんも好きだよ」「そうか、良い人と出会えてよかったね」と話すと、「最近ね、おばあちゃんという人が訪ねてきて会ったよ。おばあちゃんは、私には、お姉ちゃんがいるって。今度、会えるかも知れないと言っていたよ」

舞ちゃんは、里親家庭で虐待を受け、小学１年生の時、児童養護施設に再び措置されてきました。お父さん（里親）大好きと話していました。施設の生活に慣れ、舞ちゃん自身の気持ちも落ちつき始めた頃、再び里親委託ということになり、２回目の里親さんが選ばれ、紹介され、交流が始まり、里親家庭への外泊も体験しました。その後の舞ちゃんは楽しそうに外泊時の話をしていました。しかし、里母さんは、ボランティア活動が忙しくなり、面会が減り、外泊がなくなり、面会も途絶えてしまいました。それでも、その里親さんとの関係をやめるということにはなりませんでした。そのまま里親さんとの交流が途絶えた期間が長くなりました。そして３回目の里親さんを探し、面会、外泊が始まりました。舞ちゃんは、どの里親さんも好きだと話しています。舞ちゃんの本心は、淋しさでいっぱいであろうと思います。そして祖母が突然、現れました。舞ちゃんのルーツが少しずつ明らかになっていくのでしょう。自分のルーツが分かり、舞ちゃんの空白がうまり、そして舞ちゃんが人生を前向きに生きて行けるとよいと思います。そのためにも、彼女の学修をしっかり支援して高校進学を叶えて欲しいものです。施設職員も里親さんも、祖母も、みんなで舞ちゃんを応援するつもりです。介護の仕事への思いを実現するための第一歩をガンバレ、舞ちゃん。

後藤　志保（中２・女子）

＜志保ちゃんのこと＞

志保ちゃんは生後２ヶ月の時に父母の拘禁という理由で両親の元から乳児院に緊急保護されました。乳児院の退所を迎えますが、家庭に帰ることはできず、児童養護施設に入所することになりました。志保ちゃんが２歳の時、３人の姉たちも同じ児童養護施設に入所しました。その頃、母・祖父母の面会もあり、家族との関わりが増えました。姉３人は小学校入学と同時に母親に引き取られました。けれども志保ちゃんは幼いことや食物アレルギーがあるといった理由のため施設に残ることになりました。志保ちゃんが小学校に入学してからは、母からの連絡も面会も全くなくなりました。

６年前の作文集では小学校１年生の志保ちゃんが、覚えたばかりのひらがなで一生懸命に、お母さんが好きなこと、姉たちも好きなこと、そして施設の生活も好きだからずっといたいことを書いています。それは彼女の本当の気持ちかどうかはわかりません。そして職員の方が彼女の一つひとつの言動について、彼女の生い立ちを理解したうえで、どのように考え、どのようにしていこうかといったことを詳細に書いています。その後、志保ちゃんが小学１年生の３学期に、地域小規模児童養護施設で暮らすための承諾を得ようと母親に連絡を入れたところ、母が急に引き取ると言いました。けれども、母からの引き取りについての連絡はその後全くありませんでした。そのため母親宅に複数回足を運び、なんとか地域小規模児童養護施設への移行を理解してもらいました。小学校２年生になり地域小規模児童養護施設での新しい生活が始まりました。

そして３年前の作文集では、学校で勉強がわからなくなった時にパニック状態になったりするため、３年生から特別支援学級に在籍することになったことが書かれていました。志保ちゃんは落ち着いた環境で勉強を見てもらうことができ、パニックも減り、勉強もわかるようになって自信がついてきました。４年生になってからファンファーレ部に入部し、志保ちゃんなりに頑張っている姿が書かれています。

『児童養護施設での生活』

中２　後藤　志保

・学校のこと

私は２才の時に施設に入って今年１４歳になります。小学校２年生の時に地域小規模児童養護施設に異動になりました。中学校では特別支援学級に通っています。特別支援学級では、担任の先生とうまくいかない事が多くなってきています。例えば、目が痛くてプールを休みたかった時に信じてもらえなかった事もあります。交流学級では、「施設に住んでいるから友達になりたくない」と言われて悩んだ時もあります。

中学では美術部に入り、仲の良い子が２人できました。その２人とは、一緒に遊びに行ってプリクラを取ったり、家に遊びに行ったりします。けれども元々その子たちとはケンカも多かったので、最近は距離を置いています。また学校で私のことを理解してくれる友達がいると良いなあと思っています。

美術部ではポスターを書いたり、好きな絵を描いたりしていました。２年生になって顧問の先生が変わって、色々なルールができて、自分の思うように楽しく出来なくなったので辞めるつもりです。ゴッホの絵が好きなので、美術館に時々行っています。

体育祭では、台風の目と１０人１１脚と大縄跳びと綱引きに出ました。台風の目では、転んでけがをしましたが、立ち上がってゴールまで行く事ができました。

教科は音楽と体育が苦手です。音楽はリコーダーがみんなに追いつけず、テスト前になると施設で練習しています。体育では２人ペアになる時に１人になってしまい、１人で走らないといけなくなるから嫌です。家庭科は好きです。ウォールポケットなどを作って完成するのが嬉しいからです。大変な事がたくさんありますが、学校には出来るだけ登校しています。

・施設のこと

施設では、学校の悩み事を職員に聞いてもらい、ストレスを発散しています。児童相談所の先生にも悩みを聞いてもらっています。話をしている時に時々イライラしてきて爆発するときもあります。爆発してすっきりするときもあります。

週に一度、学習ボランティアの大学生が来てくれます。勉強を教えてもらったり、話を聞いてもらったりしています。時々公園などに遊びに行ったり、一緒に梅干しを作ったりしています。私はこの学習ボランティアを楽しみにしているので、用事があって休みになるととても残念です。

・里親さん、家族のこと

小学校３年生くらいから、ボランティア里親さんの家に年末年始やお盆、ゴールデンウィークに泊りに行っています。勉強や料理を教えてくれます。年に２回程、里親旅行に他の里親さんや施設の子と一緒に行きます。最近は高山や乗鞍に行きました。いい思い出になったので、また是非行きたいと思いました。

お姉ちゃんは私の学校のことや施設に住んでいることを知っているので、色々な事を分かってもらえてうれしいです。今年の４月に、お姉ちゃんが赤ちゃんを産んだので会いに行きました。また会いに行きたいと思いました。

・将来の夢

中学を卒業したら、介護の勉強をして、将来は介護士になりたいです。理由は人を手助けする仕事に就きたいからです。小学校の時に車いすの人が学校に来た事があって、その人と接した時に何か手伝えることはないのかなと思いました。私は小さい子が苦手なので、お年

寄りの方や、障害を持っている方の力になりたいと思っています。

『志保さんの成長を見守りながら』

児童指導員　西尾　夏美

昨年、中学１年生のときに彼女は療育手帳を取得しました。特別支援学級に在籍し、時々交流学級で授業を受けています。前回の作文は聞き取りをしながら職員が書きましたが、中学２年生になり、今回は隣について言葉添えをしながら、自分で文章を書くことができました。

中学校に入学してしばらく、新しい環境に慣れるのに時間がかかり、職員が学校に迎えに行くこともありましたが、担任の先生とのやり取りや、美術部でできた友達との関わりを通して、毎日学校に行けるようになりました。

２年生に入り、担任の先生と美術部の先生が変わって、美術部からも足が遠のき、学校にも行き渋りをすることが増えてしまいました。部活をやめてしまうのは残念でしたが、どうして嫌なのかしっかり言葉で表現し、自分の意志で決定できたということは、彼女にとってひとつの成長でもあると感じています。交流学級の女の子に嫌がらせを受けた時も、先生や職員に相談し、状況を改善するためにはどうしていこうか、一緒に考えることができました。

彼女はまじめな性格で、施設では自分で洗濯をしたり、学校へ行く前の時間を自分で学習に充てることができたり、生活のルールを守って暮らすことができています。嵐やAKB48 等、アイドルグループが好きな年相応のかわいらしい一面もあります。

彼女のよいところは、人の陰口を言わず、公平な目を持っているところだと思います。新しい人間関係や場面が苦手で、立ち止まってしまうこともありますが、人に流されずしっかり自分の考えをもって行動できる彼女に寄り添って、支援をしていきたいです。

武藤　ゆかり（高３・女子）

＜ゆかりさんのこと＞

ゆかりさんは小学３年生の頃に両親が離婚しました。それがきっかけとなり、ゆかりさんは父と母の間をいったりきたりするようになりました。親権は母親が持つことになりましたが、母親は精神的に不安定な状態でした。母親はゆかりさんを養育する意思がなく心理的な虐待も認められたため、彼女はその年の夏に弟とともに児童養護施設に入所しました。施設に入った当初は不安が大きかったのですが、施設で生活していくなかでたくさんの変化もありました。そのひとつが母親との関係でした。以前は、些細なことで怒られたり叩かれたりしていました。現在はそのようなこともなくなり、親子関係はやわらかなものになりました。けれども施設で生活し、あまり会わなくなったためか、優しくなった母親に対してゆかりさんは素直に甘えられなくなってしまいました。自分では気を使っていないつもりでも、ちょっとした言葉で無意識に涙が出ることもあります。ですから、「これからは少しわがままになってみようかな」と６年前（当時小学６年生）の作文では書いてくれました。

そして 3 年前の作文集では、中学生活 3 年間バスケットボール部の副キャプテンとして活躍し、部員たちを引っ張ってきたこと、中学３年生となり、高校進学や家庭に帰るといった卒業後の進路についての母親との話し合いの中で、揺れ動くゆかりさんの様子が書かれています。

『彼女のプロフィール』

職員　鈴木　百合

体を動かす事が大好きで、とても活発なゆかりは、小学校高学年から中学校 3 年間もバスケット部に所属し、特技も趣味も“バスケット”と自信を持って答える程好きなスポーツでした。中学校から高校にかけて、韓国ドラマにもはまっていた時期を経て、その後は韓流アイドルに夢中になり、それは社会人になった今でもさらにエスカレートし、あちらこちらでのコンサートを満喫しているようです。

そして“ゆかり”を語る時に忘れられないのは、自称、レベルの高い“おやじギャグ”“ダジャレ”です。ゆかりに太刀打ちできるものは職員も児童も一人もおらず、本人も自分の“おやじギャグ”“ダジャレ”にはかなりの自信を持って日々発信し続けた８年半でした。

以下、彼女が今年３月に県内の児童養護施設を卒園、退所し自立する子どもたちを集めて開催して頂いた“会”の中で児童代表として発表させていただいたときの感謝の言葉です。

『感謝の言葉』

高３　武藤　ゆかり

本日は、お忙しい中、このような会を設けていただきありがとうございます。

私は、９歳の時から施設で生活をし、昨日無事に高校を卒業する事ができました。４月からは、就職することが決まっています。

もうすぐ施設での生活が終わろうとしています。皆、それぞれ想いがあると思います。

私は何度も施設を早く出たいと思い、とても長く長く感じていた施設生活でした。けれども、この文を考えていたら、すごく短かったように感じ、今は施設を卒園したくない気持ちでいっぱいです。

振り返ってみれば、施設での生活は、まずは不安と戸惑いでいっぱいの思いからスタートしました。大勢での生活は、色々なことがありました。様々な行事への参加、なかでもスキーや登山、キャンプでの思い出は、語りつくせないほどいろいろなことがあります。また、みんなと一緒に手作りおやつにも挑戦し、私はシュークリーム作りも生地から作り、大成功したことも自信につながりました。みんなで長い廊下を走り回って毎日のようにリレーをし、廊下のカーペットはのびのび、ぶよぶよになり、数年前に張り替えられました。また、かくれんぼやぽこぺんをしたり、時には倉庫におやつを盗みに入ったり、消灯後に職員の宿直室をこんこんダッシュしたり、部屋で沢山のトカゲを隠れて飼育し、部屋掃除のときに職員にトカゲの死骸を見つけられ怒られたり、携帯電話の没収を巡って職員とバトルをしたこともありました。一日も早く携帯電話を返してもらうために、毎日皿洗いを１ヵ月間続けました。そうしていると携帯電話としばらくの間、距離をとり、健康的な人間らしい生活を取り戻している自分に気づき、お皿を洗いながら自分の心も洗われていくような気持ちになったこともありました。どれもこれも、今となっては笑える思い出です。また職員にすごい怖い顔で呼び出され、何かがバレたとびくびくしながら応接間に入ると、実は騙されたり、タンスの上で鬼ごっこをしてタンスを壊して全員で少ないお小遣いから弁償させられたりと、今思えば楽しいこともたくさんありました。けれども普通の家庭に比べて、集団生活はルールもたくさんあったり、欲しい物もポンポンと何でもすぐに買ってもらえるわけではなく、普通の家庭の友達を羨ましく思うこともありました。また職員に『その人、お母さん?』と聞かれた時の反応に困ったりすることもありました。親でも無い職員に怒られては、反抗してすごく酷いことを言ったり、口で勝てないときには職員相手に手を出してしまったりもしました。『何で他人にこんなに干渉されなあかんの』と思っていたけれど、今思えば、他人なのにあんなに真っ直ぐぶつかって来てくれるなんて、すごい勇気と根気がいることだったと思います。間違っていることは間違っていると、はっきり伝えてくれ、悪いことをした時には親でもないのに一緒に頭も下げてくれました。

私は入所した頃、表情は険しく、言葉の使い方もきつく、担当職員が変わるたびに、素直に甘えることもしたくなくて、とても酷く当たりちらし、職員を泣かせることも度々でした。そんな私でしたが、今は“ありがとう”“ごめんなさい”がとても素直に言えるようになり、みんなから「本当に変わったなぁ」「成長したね」と、誉めてもらえることが多

くなりました。きっと私自身が年齢とともに身に付いてきたということもあると思いますが、施設の生活の中で、家族とは違いますが家族のような繋がりと安心した雰囲気によって"強がって、反発ばかりしなくてもいい”“自分らしい自分でいい”と、いつのまにか思えるようになってきていたのではないかと思います。今はそんな日々をとても心地よく穏やかに過ごしていますが、もうすぐこんな日々も終わってしまうのだと思うと、とても淋しい気持ちでいっぱいになります。もう一つ、この８年間で得た大きな事は、特に母親との繋がりです。私は小学校３年生で入所してからずっと心のどこかで母のことを“怖い人”と思っていました。たまにあっても緊張から顔もこわばり、言葉も選んで選んで話をしていたような気がします。そんな母と中学３年の時に初めて高校をどうするか、どこから通うかといったことを話し合うことになりました。私はこれまでの人生で初めて自分の思いを母に恐る恐る伝えました。でも結局、母から返って来た言葉は「高校は施設から通ってほしい」という返事でした。その頃、中学でも色々とあり精神的に疲れ切っていた私はショックと怒りと色々な思いが混じり、とても複雑な心境でした。私の本当の思いを初めて精一杯伝えたのですが、結果としては、私の方が母の答えを受け入れ、頑張って施設で高校生活を送り、卒業しようと決めました。けれどもそのことで母にもしっかり受け止めてもらう機会にもなり、母はそれまでの母から少しずつ変わり、この３年間は徐々に外泊の回数も増やしてくれ、仕事を終えてから２時間かけて施設まで送ってくれるようにもなりました。自動車の中は母と２人きりになることで少しずつ気を使わず会話が出来るようになってきました。施設に送ってきてくれた後、施設で母と私と職員さんで会話をするとき、母が笑顔で話をしてくれる姿をとても嬉しくほほえましく見ている自分がいました。今では色々な話を気を使わず、楽しくできるようになりました。一緒に暮らせば、また、ぶつかることもあるかもしれませんが、この８年間で身に付けた“自分らしさ”でなんとかやっていける自信もついてきました。

そしてもう１つ、私はこの８年間に本当に多くの友達を施設に連れてきました。女友達はもちろんのこと、今まで付き合った男の子も連れて来て、子どもたちや職員に紹介しました。連れてきた男の子はたった３人ですが、職員に見極めてもらい、別れて良かったです（笑)。友達が施設に来て子どもたちや職員と仲良くしてくれることも、また、私の喜びでもあったように思います。

このように８年間で沢山の思い出と絆ができました。まだまだ伝えきれませんが、私はこの８年間の施設での生活に悔いはありません。そして今では感謝の気持ちでいっぱいです。４月からは施設を出て働きますが、この生活で学んだ知識や経験を生かし、子どもたちや職員とともに育んできた“生きる力”“生きる喜び”をもとに、１日も早く一人前の社会人として、何事にも勇猛果敢に取り組み、明朗闊達にして社会に貢献できるよう、日々精進してまいります。ここまで育てて頂いた施設の職員の皆さん、そして行政の皆様、誠にありがとうございました。児童を代表して感謝の言葉といたします。

職員　鈴木　百合

遡れば初めてこの本が出版された６年前、自分の気持ちを真面目に表現することがとても苦手な彼女が、職員と相談しながらなんとかその時の気持ちを作文にまとめようと取り組んでいたことを昨日のように思い出します。それから３年後の“しあわせな明日を信じて２”の出版時の彼女は中学３年生になっており、当時、進路選択にあたり、初めて母親と向き合う事にかなりのプレッシャーや緊張、戸惑い、不安を抱いていた時期でもありました。それに加え、学校生活においても、彼女の強いエネルギーが“しっかり者”として認めてもらってもいましたが、反面、そのエネルギーが先生や友達にも激しい攻撃となり向けられることが多々あり、体育祭の日にミスをしてしまったひとりのクラスメートを容赦なく責めたてた彼女に、今度は反対にクラスの女子全員から攻撃が向けられてしまうという出来事が起こってしまいました。そんな時でさえ“学校に行きたくない”という思いを言葉では何度も訴えてきましたが、休むという選択を決して選ばず、そんな状況に負けるもんかと毎日毎日、ただただ登校し続けていました。そんな彼女ではありましたが、施設に帰ってくれば一日の出来事を何もかも職員に吐露し、何とか心のバランスを保っているようでした。彼女のとても繊細な一面や手を抜けない不器用なまでの真面目さ、周囲を巻き込んで楽しませてくれるような明るさ、元気さ、ノリの良さ、そして本当は強がりとは裏腹にかまって欲しくて甘えたい気持ちが人一倍強いことも充分わかっていました。そのため職員は“ひとりじゃないよ”“どんな時でも見守っているよ”と彼女にメッセージを送りながら、学校から帰って来た彼女が少しでもホッとできる居場所、雰囲気を作り続けました。これから始まる高校生活、その後の社会への巣立ちにより、多くの人たちの出会いが彼女にはあります。色々な人たちと出会い、築いていく信頼関係によって、彼女の明るさ、元気さ、笑顔が本物の輝きを放つ時が必ず来ることを信じ、彼女を見守りました。彼女が抱える問題は、もちろん彼女自身だけの問題ではありません。彼女の持っている強いエネルギーの出す方向をこれからは彼女の未来へと繋がっていくよう導き、一緒に変えていくことが、残された 3 年間にできる私たちの役割であると決意を新たにしたことを覚えています。

そんなことを経て、彼女は中学校の先生方の協力と熱意をかけていただき、無事にクラスの仲間とともに、最高の表情と最高の涙で中学校生活に幕を下ろし、希望と期待をふくらませ新たなる高校生活に向かっていくことになりました。

彼女が高校を卒業し、施設を巣立っていく前に、ふりかえる良い機会を与えていただき、残してくれたのが、前述の言葉でした。今回、手記集を書くにあたって社会人になった彼女に連絡をとりました。照れながらではありましたが、スピーチの内容を原稿として載せる許可をもらうことができました。施設での生活８年半を振り返っての彼女の想いの一端を少しでも知っていただくことができれば幸いです。そして前回の手記集以降の彼女の様子をもう少しだけ懐かしく思い出しながら私も綴らせていただこうと思います。

高校生活をスタートさせた彼女は、新しい環境、新しい仲間と出会い、今までの彼女とは

少し違う顔を覗かせていました。それまでは誰に何を言われようと自分が正しいと信じ込んでいましたし、自分の間違いを受け入れることも認めることも絶対にしませんでした。けれども彼女が新たな場所でのスタートとともに、“居ない人のことを陰で絶対に悪く言わないことに決めた”と私たちに宣言しました。そして少しずつ少しずつ“変わろう、変えよう”と意識するようになりました。施設の生活の中でも、課題に耳を傾けられるようになった彼女に“相手の立場からするとビクビクしなければならないほど攻撃的に感じ、とても追いつめられるように感じる彼女の言葉や態度”について、その都度気付けるように声を掛けました。必要な時には向き合って話をする時間や振り返る時間を設けるようにしました。そして私たち職員もほんの少しの彼女の変化や頑張りをできるだけ見逃さず、褒めたり、認めたりしました。対人関係において、お互いが気を悪くしないで済むような、できれば心地良いと感じられるようなスキルを、何度も何度も伝え、時には練習もしました。社会に巣立つまでに彼女がそのスキルを身に付け、人との心地良いコミュニケーションができるようになり、心地良い関係が作れるように支援しました。そんな取り組みを 3 年間、彼女とともに丁寧に積み重ねていくことができました。

彼女は高校 1 年生の夏休み前頃からアルバイトを始めるようになりました。当初は家から高校へ通いたいと言っていた彼女でしたが、高校へ通い始めると、施設の近くで“ひとり暮らしをしたい”という希望に変わるのにそれほど時間はかかりませんでした。施設から高校に通うメリット、デメリットを彼女なりに考えたようです。彼女の中にはたくさんの自由を手に入れたいという思いが大きく膨らんでいました。私たちとしては、かなり難しいことも予想して彼女にも伝えてはいました。彼女の中には、自由な高校生活への憧れと、本当はいつでも引き取れる状況にも関わらず、子どもの居ない生活をもっと楽しみたいと思っているのではないかという母親への疑念を抱いていたのではないでしょうか。彼女はその思いをぶつけずにはいられなかったのではないかとも思われました。“ひとり暮らし”を目標に、彼女は 3 年間アルバイトに力を注いでいました。アルバイトだけではなく、当事者の会主催の交流キャンプや、県内の施設入所の高校生交流会といった行事などにも積極的に参加しました。そしてそこでの出会いや体験が、彼女に今の自分の置かれている状況から将来へと考えるきっかけ、学びにもなったようで、参加し終えて帰って来る彼女は、確実に一歩一歩成長していきました。そういった行事に参加させていただいた喜びとともに関係者の方々にはとても感謝しています。

社会人となった今もなお、そこで出会った方々とも連絡を取り合ったり、訪問をさせていただいたりして繋がりを持たせてもらっていることは本当にありがたいことです。

振り返ってみると、母親も彼女が高校入学までは一番に自分の仕事、自分の生活スタイル、自分の時間を優先させていました。どこかぎこちない緊張感の拭えない母子関係は距離が縮まるどころか少しずつ広がってしまい、母としても子どもたちとの接し方や関わり方に戸惑いやしんどさも強く感じておられたと思われます。施設から面会のお願いをしても、学校の長期休暇以外は仕事を理由に断られることも多く、父親の送迎で父親宅に外泊し、その

外泊中に近くの母親の家にも顔を出すというのが現状でした。彼女や弟は親権者である母親よりも父親の方が自分たちのことを大切に思ってくれているのではないか…　そんな母親がなぜ親権を持ち続けるのかという強い不満や不安を、彼女に抱かせることにもなってしまっていました。その時々の大人の勝手な言い訳や事情にいつも大きく振り回される彼女は、心をかき乱されてしまい、それを生活の中で激しく怒りとしてぶつけてくることも多かったです。そんなときは話を聴き、気持ちを落ち着かせていくような状況でした。母親は3年前の彼女と児相と私たちとの話し合いで約束をしました。母親は彼女の高校3年間、その約束を精一杯努力して守ろうとして下さいました。母子関係に改善が望めなければ、彼女の希望する“ひとり暮らし”を選択させる方向で考えて行く方が絶対に良いと思っていました。けれども母親は私たちのそんな心配をよい意味で大きく裏切ってくれました。少しずつですが、彼女と弟の都合を最優先に外泊を行って下さるようになりました。家と施設の送迎も車で片道 1 時間半かけて仕事が終わってからでも嫌な顔せずに続けて下さいました。この母の行動は彼女の心を大きく動かしたように思います。いつの頃からか、母親に見せる彼女の表情は柔らかくなりました。彼女の話を聴く母の表情もとても温かな穏やかなものへと変化していきました。そんな母親と彼女の姿を見せてもらいながら、私たちは驚きとそれ以上の大きな喜びを感じずにはいられませんでした。

彼女との出会い、一緒に過ごした 8 年半。彼女の成長をたくさん近くで見させてもらいました。そして私たちも彼女のおかげで一歩一歩成長させてもらいました。“失敗をさせないように”支援することも大切かもしれません。けれども失敗からしか学べないこともあります。それを乗り越えられるように信じ見守り支援していくこと、乗り越えられた経験は子どもたちにとって社会の中で考える力、生きる力にも繋がっていくのだということを改めて私たちも学ばせてもらったように思います。8年半という長い年月と、様々な人たちと出会い繋がったこと。何よりも彼女が自分自身の生いたちや環境、そして現実の自分からも逃げずに向き合ってきた積み重ねによって、彼女の持っている本来の笑顔がようやく顔をのぞかせることが多くなりました。最後の半年は肩肘はらず、とても自然に出せるようになっていました。そのことに一番驚いていたのは誰よりも彼女自身でした。施設を退所後も毎月のように泊りに来てくれます。みんなに可愛がられ、いじられながら、会社で楽しくやっているようです。「“辞めたい”という言葉なんて全く頭によぎったこともないわ」と笑い飛ばしています。母親との生活にも多少の不満もあるようですが、腹を立てるほどのことでもないと話します。泊まりにきても相変わらずおしゃべりな彼女は、私たち職員を何度も「ねえねえ、お母さん聞いて!!」と間違えては笑い、言い直しています。その姿に母との穏やかな二人暮らしも想像でき、私たちはホッと胸をなでおろしています。彼女の巣立った喜びと同じくらい、いやそれ以上の寂しさも胸に押し寄せてきます。それは 8 か月たった今でも時折ひょっこり顔を出します。

私たちの人生において、もちろん悩む日、泣きたくなる日もあるけれども、それ以上に子どもたちとの出会い、彼女との出会いはとてもとても大きな喜びであり大きな幸せです。

彼女との出会いに感謝・・・“ありがとう”の言葉を添えて、これからの彼女の未来もずっと見守り、応援し続けていきたいと思います。

小林　晃（２１歳・男性）

＜晃君のこと＞

晃君は、市民病院で仮死状態で生まれました。9 日間入院をして、そのまま乳児院に入所しました。2 歳で児童養護施設に移り、ずっと施設で暮らしていました。晃君を産んだ時、母親は 41　歳でした。晃君と他の 8　人のきょうだいは異父きょうだいです。晃君の父親はわかりません。母親は晃君を妊娠中に妊娠中毒症になり、養育が困難になったため他の 3 人の子どもたちを先に児童養護施設に入所させました。晃君を出産した時、母親は経済的自立能力も育児の意思もなかったため、晃君は施設に入ることになりました。

6 年前の作文集では晃君は一度も家庭で生活したことがなく、施設で 12 年間暮らしてきましたが、思い出もあまりなく、やっと思い出したことは 5 歳のときの七五三詣りで飴をもらったことでした。晃君は母親とは会ったりしていますが、将来は一緒に暮らすことは考えていません。3 年前の作文集では、希望の高校進学が叶い、部活やアルバイトなどをして充実した日々を送っていることについて書いてくれました。

『３年間を振り返って』

２１歳　小林　晃

高校は希望の学校だったし特に大きな悩みもない高校生活でしたが、高校 3 年生の時はやはり進路について悩んだ時期でした。

福祉系の大学への希望は初めからありましたが、就職か進学かで悩みました。悩みの原因はやはり金銭面です。貯金もなく授業料などどうやって払って行くのかわからず、ギリギリまで迷っていました。奨学金をもらったり借りたりする事でやっていけるとわかってから、本当に進学することに決めました。

希望した大学は短期大学部幼児教育科です。その大学のオープンキャンパスには５回全部参加しました。参加してさらにこの大学に入学したいと強く思うようになりました。高校ではあまり勉強しませんでしたが、指定校推薦で無事に志望大学に合格出来ました。

高校在学中は“将来のために”と少しアルバイトもしましたが、携帯代や遊び代などで貯金は全然できませんでした。

大学進学することになって、一番心配で困ったことがやっぱり金銭面でした。入学金は雨宮財団の奨学金で払ってもらえることになり本当に助かりました。授業料は日本学生支援機構から月々１０万円借りる手続きをしてもらい少し安心しましたが、入学前から借金持ちになってしまいました。

施設からは昼食代と小遣いで月に１万円もらっていましたが、昼食代は節約できたのですが、交通費の方は節約できず出費が多かったです。交通手段は市内の駅から大学までは大学のスクールバスを利用して行くのですが、市内までは民間のバスを利用するため、月に２万円ほどかかりました。それから教科書代がとても多く、半期に３～４万円ほどかかり本当に困りました。

アルバイトも探しましたが、なかなか都合の合うバイトがなく、１ヶ月に数日だけとかで金銭的にはどんどん苦しくなっていきました。だから大学の一番の思い出は、ずっとお金に困っていたことです。よい思い出としては、１年生の時に２４時間 TV の募金ボランティアをしたことです。友達と一緒に参加していろいろな人と触れ合えたし、人の善意の温かさが分かりました。

大学では保育園・幼稚園・施設実習・児童館実習がありました。その中でも施設実習が一番楽しかったし自分に合っていると思い、やっぱり施設で働きたいと思いました。交友面では友人もたくさんできて、いろいろな所に遊びに行き有意義に過ごしましたが、金銭的なことをあまり考えなかったので、後からかなり後悔しました。２年生の 11 月で 20 歳になりました。20 歳になったら措置解除になり、施設を出て衣食住のすべてを自分でやらなければいけないのですごく不安でした。けれども幸運にも施設の学習指導員として中学生の勉強を見ることになり、住む所は確保できたので安心しました。でも、今までとは違って食べた分の食費は自分で払うため結構負担が大きくなりました。

就職に向けては、保育園・幼稚園は視野に入れず、施設一本で進めました。就職活動に入るのが遅かったため、希望していた施設には就職できませんでしたが、施設の職員から他の施設を紹介され、そこの就職試験を受け無事合格しました。就職先は決まったのですが、いざ自立するとなると先立つものがなく、アパート代や生活のための家財道具を買うお金もありません。アパートの入居代は兄に少し借り、最後のバイト代が入ってからアパートを探して契約しました。探すのも入るのもギリギリで、就職先に赴任する３日前にやっとアパートに入ることができました。施設では高校を卒業する児童には自立援助のための支度金が数多くありますが、大学を出た自分には何の支援もなくてすごく困りました。高校生を羨ましく思いました。今後のためにもこの制度の見直しが必要ではないかと思います。

就職した今、一番必要なのは自動車の運転免許です。高校生の時にしっかりアルバイトをしなかったので、高校卒業の時に自動車学校に行けませんでした。大学在学中も授業や実習であまりアルバイトができなかったこともあるのですが、アルバイトより友人との遊びを優先してしまったので、就職で施設を出る時には本当に困りました。このときも職員から助言されても貯金しないで使っていたことを後悔しました。職場からも自動車の免許を取るように言われましたが、まだ貯金が足りないため、育った施設の職員に立て替えてもらい入校しました。これから毎月少しずつ払って行きます。

僕は産まれてから今まで一度も家族と一緒に家庭で暮らしたことがなく、一人暮らしも

今回初めてだったので、電気を使いすぎるとブレイカーが落ちることや光熱費の払い込みの方法など、知らないことが沢山あって、育った施設の職員に電話で聞いたりアパートまで来てもらったりしました。

最近の悩みは、この職場がいまひとつ自分に合ってない気がしていることです。施設の雰囲気や職員間の人間関係などです。転職の事も考えてしまいますが、希望していた職種なのでもう少し頑張ります。

『本当の自立とは』

職員　杉井　恵美

前回の振り返りから３年、高校生活を楽しく順調に過ごしてきた彼も、高校３年生の時には本格的に自分の将来に向き合うことになりました。在学中は土日に喫茶店のアルバイトをしていましたが、アルバイトに入る日数が少なかったこともあり、携帯電話の料金を払うと後はそれほど残りませんでした。それでも他のアルバイトを必死に探すといった様子も見られず、結局卒業時の自動車学校のお金や進学のためのお金は全然貯まりませんでした。進学はしたいが貯金はなく、また工面したり親類から援助してもらえる当てもないため就職か進学かがなかなか決まらない状態でした。

でも彼が進学して福祉の仕事に就きたいと思っていることは分かっていましたので、返済義務はあるが日本学生支援機構の奨学金が借りられることや、児童養護施設や里親家庭の児童への入学金や授業料支援の奨学金がある事などの情報を提供してきました。また入学金や授業料が免除になる福祉系大学があることなども伝え、資料などを見て一緒に検討しました。実際、施設の職員には奨学金を借りてバイトをしながら大学に通い、現在働きながら返済している人が大勢います。身近にそういう例があることで、奨学金とバイトで進学が無理なことではないと考えるようになり、進学を決めたようでした。4 年生大学も視野に入れましたが、彼は保育士の資格だけで良い、と短期大学にしました。当たり前ですが卒業後の奨学金返済のことなどを考えると、２年間で卒業し、就職して返済を開始したいと思ったようです。

テキパキと行動に移さないマイペースの彼の性格に、こちらが無駄に焦り心配もしましたが「指定校推薦で県内の短大に無事合格することができた」と結果を聞いた時は本当にほっとしました。

進学に関して一番心配だったのが金銭面と住居です。住居については、帰る自宅や母親からの支援もなく、彼自身に貯金もないため一人暮らしは無理でした。そのため措置延長で 20 歳まで施設で生活することになりました。彼も母親の支援は当てにしていませんでしたが、反面、一般的な親と比べて、こういう時に子どもの力になれない母親に対して、多少不満があったようです。

入学金は雨宮財団の奨学金を受け、生活費と授業料は日本学生支援機構の奨学金を毎月

10 万円借りて当てることにしました。また、授業料の支払いは短大に直接お願いをして、半期ごとの納入を毎月の納入にして頂きました。施設からも昼食代と小遣いとして月に１万円出ていました。それでもバス代や昼食代、教科書代、と毎月入る分と同額程度のお金が掛かったようです。もちろん奨学金だけで生活が回る訳ではないのでバイトを探すように声を掛けていましたが、短大の授業終了時間は結構遅く、平日のバイト先はなかなか見つかりませんでした。でも、何より彼に、必死に探すという姿が見られなかったことが原因でもあったと言えます。

大学生活は特に悩むこともなく、本当に有意義に過ごしていました。趣味仲間の友人も増えて名古屋や東京へ遊びに出かけ、北陸への海水浴や友人の実家訪問など本当に楽しんでいました。しかし、生活費がギリギリなのにバイトが決まらず、「お金がない」と言いながら「何とかなる」と遊びに出かける彼を見ると、少々、いや、かなりやきもきしました。

元々温厚で優しい彼の性格なのですが、必死になることが少なく、「誰かに任せておけばやってくれる。何とかなる」といった甘い見通しと、他力本願的な面も強く、結局自分に甘く弱いところが退園する時の彼に返って来ました。

就職活動はそれなりに頑張り、第一希望としていた児童養護施設に就職することができました。２年生の時に実習させて頂いた施設が強く印象に残ったようで「子ども達がとても可愛く職員も温かい。この施設で働きたい」と珍しく気持ちを高揚させていましたが、この施設の求人が無かったため就職は実現しませんでした。自分の育った施設や、実習させていただいた施設が彼の描いている施設像のようです。

就職が決まり本格的に自立の準備に取り掛かったのですが、２年生の後半から始めた飲食店のアルバイトも土日しか働けなくて、アパートの敷金礼金の準備ができず、３月半ばに最後のバイト代をもらってからアパートを探し、赴任日の数日前にやっと入居できるといった次第でした。おっとりした性格の彼に比べて、せっかちで待つことの苦手な私は「アパート探しているの？お金は？保証人は？まだなの？いい加減にしないと困るよ」など、職員の立場を超えてしつこく言い過ぎたくらいです。でも、確かに、終わりよければ全て良しでした。

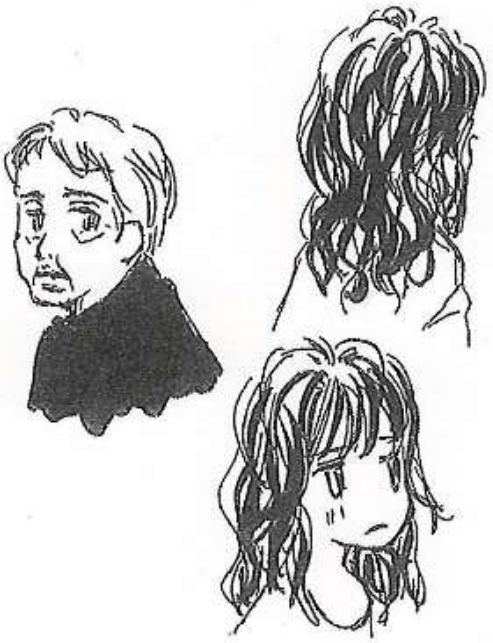
彼はこのペースで歩いて行くのがベストなのかも知れないのに、職員側が周りのスケジュールに合わせようと無理やり急がせた所もありました。職員として社会生活に必要な色々な事を教えてきたつもりでしたが、一人暮らしで困っている彼を見ていると、私たちは反省する点ばかりです。彼のように産まれてから一度も家庭で生活した事がなく、長期の自宅外泊もない児童には言葉で教えて行くことより、退園前に実際に一人暮らしの生活体験をさせて身に付けさせて行くことが本当に必要です。けれども彼はすごく困ったときには素直に HELP を出してくれるので、その点では安心しています。

ただ、施設や兄との連絡は滞りませんが、母親との関係は兄任せで彼からの働き掛けはなく、自発的にしたいとも思っていないようです。母親との関係は良くも悪くもなく今までと何ら変化はありません。社会生活が長くなれば施設との関わりは薄れて行きます。そのよう

な時に少しずつでも歩み寄りがあれば良いかなと、思っています。何はともあれ無事に卒業・就職・退園して一人暮らしをしている彼を、これからも後ろの方から見守って行きたいと思います。

２０歳までの措置延長は彼にとってとても助かりましたが、２０歳の誕生日で措置解除退園となった事は、大学進学を勧められたのに途中で掌を翻されたような気持ちになったようです。でも退園できる状況ではない彼は施設の学習指導員として中学生の学習を指導することで、在園とバイト先を確保できました。これも彼が受けた支援の一つと考えることはできますが、しっかりとした制度が欲しいものです。

高校卒業時の退園には色々な支度金があるのに、大学卒業時の彼には何ひとつ支援がありません。彼と同時に大学進学で退園する児童を横目に見ながら、「これっておかしいよね。自分も高校で退園していた方が苦労しなかったのかな？」と不満を漏らしていました。確かに親の援助を受けながら施設の支援も受けられる児童と比べると、彼が嘆く気持ちも分からなくもないのですが、これが彼の人生なのです。周りと比べず逞しく自分で自分の人生を切り開いて行って欲しいと、切に思います。



榊原　舞子（２０歳・女性）

＜舞子さんのこと＞

舞子さんが生まれた後、両親は離婚し、母親は実家に戻りました。母親は舞子さんを託児所に預けてスナックで働きました。母親は舞子さんを実家に預けたまま帰って来ない日が多くなり、舞子さんの養育は祖父母に任せっきりなりました。母親は覚せい剤取締法違反で逮捕され、執行猶予となり実家で再び生活するようになりました。そして母親は舞子さんを連れて実家を出て、覚せい剤の関係で知り合ったと思われる知人と同居しました。舞子さんが 4 歳のとき祖父が児童相談所に相談し、1 か月ほど一時保護となりました。母親は再び覚せい剤取締法違反で逮捕されました。舞子さんは伯母に引き取られましたが長期間の養育は難しく、6 歳のとき児童養護施設に入所となりました。

舞子さんは母親が腕に注射をしているところを見ていました。そして母親が覚せい剤を使用し服役していることを、3 回目の逮捕のときにはわかっていました。けれども母親が刑務所にいることを他の子には知られたくはありませんでした。問題のある母親ですが舞子さんは母親が大好きです。そしてずっと会っていない父親のことも気になり、電話帳で探して電話をかけました。父親は再婚し、子どももいました。父親から「元気でよかった」とメールをもらいうれしかったようです。舞子さんは母親と再び暮らせるようになり退園していきました。6 年前の作文集では施設の生活は全部いやだけれど、今は感謝していると書いています。

そして、3 年前の作文集では舞子さんが中学生の時に家庭引き取りとなり、母親との生活が始まりましたが、しばらくして舞子さんは学校に行かなくなり、所在不明となって一時保護されたことなどが書かれています。その後は母親と知人のいる町へ転出したということを祖父から聞くことができたけれど、詳しい状況はわからなくなったと職員さんが書いてくれました。

『２０歳になった榊原舞子』

職員　加藤　真紀子

14 歳で退所してから 6 年、舞子さんは今年、成人しました。

現在は 1 人で自立して生活しています。

母のもとへ家庭復帰した舞子さんでしたが、母が再度服役して 1 人になったのは、彼女が何歳のときだったでしょう。母の知人や地域の民生委員等の心配を受けて、福祉事務所につながり、生活保護を受けながらアルバイトで生計を立てました。しかし、結婚を機に生活保護を辞退しました。その後、子どもが生まれました。夫は育児に協力的でした。姑も、同じ市内に住んでいて協力的でした。保健師が訪問すると、問題なく子育てをしていたといいます。しかし、子どもを保育園に預けて働き始めた頃から歯車がかみ合わなくなりました。子

どもを夫に託し舞子さんが家を出ることで、短い結婚生活は終わりました。
　これが、私が知っている 20 歳までの短い彼女のプロフィールです。

　退所して 3 年間は、母の生活が安定しないため、彼女自身も学校生活が送れないほどの不安定な苦しい期間でした。そして、その後の 3 年間はさらに大きな変化が続いた大変な時間でありました。14 歳から 6 年間、舞子さんは大きな人生の荒波を超えてきたのです。
　実母は出所してから再婚し、子どもを生みました。舞子さんが母と暮らしたのは、3 歳までと 14 歳からのわずかな時間です。離婚して一人になった舞子さんは、母と一緒には暮らしていません。舞子さんは、素直に自分の妹か弟の出生を喜んだでしょうか。それとも人生をやり直している母に手を差し伸べ、子育てを手伝っているのでしょうか。
　離婚によって結婚生活も子育ても終わった舞子さんでしたが、家庭生活や子育てのスキルは十分に持っています。少々のことではへこたれない強い精神力もあります。舞子さんが子どもを夫のもとに置いて離婚したことは、自分自身が母に育ててもらえなかったことなど、いろいろな辛い思いからの苦渋の選択であっただろうと思います。
　舞子さん本人は、再び新しいパートナーと出会い、新しく生き直そうとしています。願わくば、逞しい母のように何度も人生をやり直し、育ち直しを果たして欲しいです。
　以上は、退所後 6 年間、舞子さんと連絡が取れないまま、いろいろな知人を通して調べたものです。母親は薬物依存であり周囲の支援なしには子育てを含む十分な社会生活を営むことは困難であったと思われます。
　「この子は、18 歳まで施設にいたほうがよい子だと思う」――退所を前に児童相談所のケースワーカーが言った言葉は、本人のためだけでなく、母のための言葉だったのではないでしょうか。親を思う子どもと子を愛する母親がいても、親子を取り巻く支援が少な過ぎました。施設のアフターケア、保護司の支援、市（民生委員）の見守りは、住所が変わったり期間が過ぎたりすればすぐに届かなくなってしまいます。働くのに十分な体力がない母、頼れる資源がない母子家庭は、施設を退所した子どもが安定して暮らす環境には程遠いものでした。
　親の愛情を受けられなかった子どもが親になったとき、家庭づくりや子育てにハンディがあるとしたら、社会的養護は役割を十分果たせていないことになります。子どもたちが家庭復帰をするとき、自立していくときに、施設は次の 2 点に配慮したいものです。
　親が役割を果たせない期間があったとしても、自分の周りには親に代わって心配してくれる人や応援してくれる人がいっぱいいること、専門に支援してくれる機関があること、安定した親子・夫婦関係は適切な応援を受ければ維持できることを子どもたちに知らせておくことが大事だと思います。
　自分自身を自分の言葉で整理することも大切です。生い立ちの整理を進めていくなかで、またナラティブ・セラピーのなかで、「親は親、自分は自分」「親も大変だった」など自分と親との関係を客観化・相対化することです。そして、「私は困ったら助けを呼べる」「私は何

でも話せる人がいる」など、自分の強みを自覚することです。

施設は生活の場であり、その中にモデルとなる大人がいます。家庭復帰して目の当たりにする現実は、施設より家庭機能の整ってない生活であることもあります。親の社会的弱さを受容しながらも、家族の中で役割を果たしていくだけの強さを持って、家庭復帰や自立を目指してほしいです。施設の集団生活で身に付けた周りの人の立場や気持ちを思いやる力は、家庭でも社会でも十分役割を発揮すると思います。

近藤　隆志　（２１歳・男性）

＜隆志君のこと＞

隆志君はネグレクトのために２歳２カ月のときに児童養護施設に入所しました。入所前の隆志君は、食事はほとんど与えられなかったため２歳児の体格よりも小さく、玩具も与えられず、表情もありませんでした。母親は子どもとどうやって関わったらよいのかわからないようで覇気のない表情でした。

６年前（当時中学３年生）の作文集のとき、隆志君は受験生であったため忙しく、自分の過去をみつめ、現在、未来を書くことが難しかったため、職員が聞き取りました。隆志君は「知らん」「覚えていない」と言いながらもいろいろ話してくれました。幼児グループにいた時の仲間のことや小学生のときに他児が勝手にゲームを使っていたこと、地域小規模児童養護施設に来てよかったことなどを話してくれました。

隆志君は日本国籍ではないのですが、３年前の作文集では、その事実を高校生になった隆志君に伝え、しばらく会っていなかった母親のところへ職員さんと一緒に訪れた時のやりとりや心境が書かれています。

『一人暮らし４年目の隆志くん』

職員　渡辺　真理子

３年前の文集のとき、隆志君は高校３年生で、就職活動まっただ中でした。その時の様子を振り返りながら、現在の生活について職員が聞き取りをしてこれを書き上げました。

〈高校生活の振り返り〉

高校２年生までは進学希望で、クラスの中では上位をキープ、平日は弓道部、週末はスーパーでバイトと自分なりのリズムで生活をしていました。

３年生になり友人達は大学進学に向け進路を決めていくなか、家族からの援助が全く期待できない隆志君にとっては、大学費用をどうするかが最大の問題でした。そこで６月の三者懇談で「あのさ、就職に変えたいんだけど」と担任にいきなり切り出しました。就職難と急遽の進路変更でしたが、真面目さと成績が評価に繋がり、食品関係の仕事を第１希望として

学校推薦をもらい試験を受けました。
　学校の先生も隆志君の成績、日頃の様子から大丈夫だろうと言われていましたが、結果は不合格。平常心で「やっぱ面接かな･･･？」と語っていましたが、やはりその後落ち込み、友人等が次々に内定をもらい進路が決まる中、焦りを感じていたようでした。

〈就職してから〉
　次に選んだ会社が現在の自動車関係の仕事でした。今も会社の寮で暮らしながら毎日頑張っています。卒業式後バイトで貯めたお金で自動車学校に通い、免許をとるとすぐに車を購入、会社まで車で通勤をしています。一人暮らしを始めて３年半の隆志君に今の感想を聞いたところ「ふつう」「困ったことは？」「食事かな…」昼食は会社でまかないのおばちゃんが用意してくれます。今までは残った食事をタッパーに入れ夕食で食べるようにといただいていました。けれども２０歳を過ぎたら自分で食事の準備することがルールのようで「今は忙しくって食べないこともある」「ここんところ会社の健康診断で毎年コレステロールの数値が高くなっている。やっぱコンビニの弁当とか揚げ物が多いからなぁ…　外で食べるときは野菜を食べるようにしている。朝は野菜ジュースを飲んでいる」と、それなりに健康面に気をつけている隆志くんにほっとしました。
　昨年、慰安旅行を兼ねて中国にある工場に見学に行く機会がありました。国籍の違う隆志くんにとっては、パスポート申請が大変な作業でした。会社の常務さんたちの協力もあり何とかパスポートが取れ、初めての海外旅行に行き、お土産には高級なウーロン茶を施設にもってきてくれました。
　「中国に入国する時、俺だけ時間がかかった。やっぱり日本のパスポートだといいのになぁ。簡単に入国できるし。いつも会社の仕事は忙しく残業が多いけど、そのおかげで給料も多くなるし…。上の人たちが定年で代わっていくから、中国の工場に行くのが回ってくるかな。短い期間ならいいけど、長いと３年ぐらい行かされる。上に行くためには、中国に行って、こちらでやってる仕事を教えんといかんし…」と仕事について語る隆志くんは現実を見据えた大人の顔をしていました。
　彼に日本へ帰化する気持ちがあるのかを尋ねると「別にいい。手続きが面倒くさい」と最初は言っていたが、本心は違いました。「ネットで調べたら、申請を全部してくれるところがあるんだって。弁護士がやってくれる。書類を取り寄せたり、変わりに書いてくれる。それで１０万円かかるからなあ…　でも手続き大変だからそれぐらいかかるよねえ。それぐらいならいいかなぁ」とぽつり言葉にしました。今の隆志くんの課題は帰化するための手続きを行なうことのようです。
　お母さんとの繋がりについては、パスポート申請時に書類作成で母に確認したいことがあり、一緒に尋ねたことがありました。それ以後は会っていないし連絡もしていないとのことでした。今のこの距離感がお互いに良いようです。
　隆志くんは施設内行事、卒園生の同窓会に来てくれたり、年に一度は私にもメールをくれ

ます。今回は、原稿依頼のおかげで彼とゆっくり話ができました。最初は、「消息不明ということで…　いいじゃん」なんて冗談を言っていました。しかし、話をしているうちに大人としての立ち位置でお互いに会話をしていました。彼の仕事に対する野心もちらりとみえ、国籍問題についても彼なりに考えている事がわかりました。この機会がなければ、彼と親のこと、国籍のことを掘り下げて話すことはなかったと思います。触れられたくないような話にも答えてくれた隆志くんに感謝しています。私は彼を見守る応援団の一人として、今後も繋がっていきたいと思います。

橘　渚（２５歳・女性）

＜渚さんのこと＞

渚さんは、両親の離婚後、養育が難しいということできょうだい 4 人とともに児童養護施設に入所しました。児童養護施設で 6 歳から 18 歳まで過ごしました。渚さんが高校 2 年のときに、母親は再婚し、出産しました。高校を卒業した渚さんは施設を退所し、就職しました。

6 年前の作文集では自分の中に残っている入園のときの様子、そして卒園まで抱き続けた施設生活への思いなどが書かれています。渚さんが抱いた「なぜ自分はこんなところにいるんだろう」「自分が帰ってくる場所はどうしてここなんだろう」といった気持ちは施設の子の誰もが思っているに違いありません。そして施設生活の中で起きるいじめの様子、そうしなければならない子ども集団の力関係なども書かれてありました。そういった生活を重ねると人を信じることもできなくなってしまったこと、家族を頼りたくてもうまく頼れない状況など、施設での暮らしが綴られていました。そして母親が再婚し、新しい父親ができたけれど、どのように接したらよいのか困っていること、母親が妊娠していること、そのことを素直に喜べないことも書かれてありました。

そして、3 年前の作文集では、施設を卒園して寮付きのパン工場に就職したものの、2 か月で辞めてしまったこと、その後、車の部品工場やキャバクラなどで働き、母親と新しい父親、その間にできた妹との生活が始まったけれど、思い描いていた家族生活ではなく自分の居場所を感じられず、生活のしづらさなどから家を出て結婚したいという思いを書いています。母親との関係についても、ささやかな温もりを感じた時もありましたが、愛情を感じられないといった複雑な心境が書かれています。

『渚さんのこと』

職員　山本　純也

結論からいうと、渚さんには今回残念ながら原稿を書いてもらうことができませんでした。彼女とはこの原稿依頼を受けたのをきっかけに、しばらくぶりに会い、食事をしながら近況を聞かせてもらうことができました。再び仕事を辞めてしまうといった“大丈夫なの？”と思わされる話を聞きながらも、働きながら自活生活を続けていることだけで、「すごい！よくがんばってるな」と思うのは、卒園生が社会に出て働いていること自体が大変なことであり、しかも自活していることはさらに難関なことだということを経験上、知っているからです。

たとえば、それまで施設や親許などで監護下におかれていた子が解放された時、一体どうなるでしょう。たがが外れ自由過ぎて乱れが生じ、いつしか負の連鎖に対するコントロールを失って、朝起きられないといった生活そのものが荒んで、仕事に行けなくなることがあります。あるいは孤独を感じたり、ホームシックになることもよくあることです。共同生活の時の煩わしさが人恋しさに代わっていくのもこの頃です。その寂しさを埋めようとして軽い気持ちで異性と交際し、ひとりよがりの依存体質により、ちょっと意思疎通がうまくいかなくなると、精神的に不安定になり仕事に行けなくなることもあります。何かあると八つ当たりや責任転嫁をして縦横無尽に振る舞い反発することができたのも、実は依存できる相手がいたからであることに後から気付きます。その依存できる関係性がリセットされた社会である就職先においては、それまでの振る舞いが通用せず、受け入れてもらえません。単純に仕事上のことなのに厳しく言われたりすると、それまでの成育歴から「愛されてない」「どうせ私なんか・・・」という感じ方が再発し、やる気が削がれ、ふて腐れ、後先考えずに仕事を辞めてしまうことは、よくあることなのです。このような理由から、仕事を辞めてしまう子を何人も見てきました。だからこそ、渚さんは「がんばってる」と思えるのです。

さて、本題である原稿については、書くこと自体は快諾してもらったものの、いよいよ期日がくると「何も書きたいことが思いつかない。やっぱり無理だった」というメールの返信がありました。それからというもの電話だけでなく、メールさえ返信してもらうことがままならなくなりました。私は、こういうことが起こりうることを想定し、そうならないための予防やフォロー体制を十分にとってこなかったことを後悔しつつ、アプローチを続けました。そしてアンケート形式の質問に切り替えたことで、最後の最後でメールの返信がありました。その内容を以下に紹介させてもらいます。

・2 年半くらい勤めていた車の部品工場は、朝起きるのが辛くて辞めた。
・今はパートタイマーでパチンコ屋に勤めている（自分で休みを決められるからそれがいい)。
・3 年ほど働いていたキャバクラは楽しかったけれど、営業するのが面倒になって辞めた。
・結婚したいと思っていた彼とは 2 年半くらい付き合ったが、いろいろあって別れた。

・母からの愛情は、感じない訳ではないけど少しだけ足りなかったと思う。これからは友達みたいな親子関係になっていけたらと思う。
・一緒に暮らしていた母と義父との間にできた子どもには幸せになってもらいたい。きょうだいも含め、あまり会う機会は持っていないが、これからも今まで通りでいいと思っている。
・今は好きな人と一緒にいる時が、幸せだったり生きがいを感じる。
・現在、悩みや不安、困っていることは特にない。
・これから目指すところとしては、結婚して子どもを産んで幸せになること、そんなふうに普通に生きていけたらと思っている。

ひとつひとつの質問に対し、簡潔ながらもやっとの思いで打ち込んでくれたことに敬意を払いつつ、私が感じたことは、「葛藤と向き合うことの難しさ」です。葛藤というしんどさから逃れるためには、考えないようにすること、関わらないようにすること、それが一見、楽だし、面倒なことにならないための手段だと捉えがちになります。しかし、根本的な問題が解決していかない以上、パターン化したモノの見方や感じ方、表現方法は変わることなく、結果、もとの同じ問題へと還ってくることになります。

渚さんは施設を卒園して寮付のパン製造工場で働いていましたが、朝早くからの勤務だったり、残業が毎日あったりしたため辛くて2ヶ月ほどで退職しました。寮を出なければならなくなり、切羽詰まって母に自ら頼み、母と義父、そしてその両親の間に生まれた妹の4人で念願だった家族生活を開始します。けれども当初思い描いていた温かな家族像とは違っていました。生活リズムの違いから小言を言われたり、自分のペースで生活できなかったりしました。彼女は当時付き合っていた彼との結婚を夢見ていたこともあり、家族と別居し、思い切って一人暮らしをスタートさせます。しかし結婚したいと思っていた交際相手は、甘えられるような自立した大人ではなく、彼がある問題を引き起こしたこともあり、愛想を尽かして別れることになりました。今は別の好きな人がいるそうで、その人と会っている時が一番楽しいと言います。それでも交際宣言できる人がいるわけではなく、生活を維持するために必要な最低限の仕事をこなしつつ、一人で暮らしています。渚さんは悩みや不安はないと言いますが、そのような生活体験を通して感じること、考えることは実に多岐に渡り、葛藤しないはずはないと思うのです。

若い頃はよく「将来のことを考えなくても今さえ楽しければいい」と無目的に毎日を過ごしてしまいがちになりますが、歳を追うごとに現実と理想の狭間の中で、将来を見据え焦りが出てきます。結婚願望の強い渚さんですが、それゆえに孤独を感じることも多いと思います。仕事にやりがいを見出せず、気持ちは楽であってもパートという立場での就労に、将来への不安も抱えていることでしょう。彼女からは「考えてもしょうがない」という声が聞こえてきそうですが・・・。

「自分の将来はごく普通の家庭を築き、そこで幸せになる」ということには何ら批判を受けるいわれはないでしょう。けれどもそこにすがる生き方しか見出せないとしたら、彼女の

長い人生に危うさを感じられます。人は少なからず依存して生きているわけですが、しっかり自分の足で立って、生きることの意味を見出せなければ、自分で自分の幸せを掴むことができず、他力本願となっていきます。たとえ理想と思える相手と巡り合えたとしても、困難にぶつかった時に「怒り」や「あきらめ」などに支配され、後退するしかなくなってしまいます。

私個人の見立てとして、渚さんが原稿を書けなかった理由を以下に述べさせてもらいます。渚さんは『しあわせな明日を信じて２』で施設生活について、施設暮らしは「我慢を覚えた場所だった」と振り返っています。確かに彼女にとって我慢の連続だったと思います。大きな問題を起こすこともなく、自分をさらけ出したり、誰かとぶつかり合うことも少なかった渚さんは「我慢」し続けたことにより、衝突を避けることができたでしょう。その一方で「感情交流」を逸した人生であったとも言えます。人は感情交流を通して初めて新たな自分や相手について知ることができます。そしてその先にある関係性の展開や発展の体感を逸したということでもあります。さらにたくましさの獲得や成長は人との関係性から生じた感情とその内省といった気付きの連続から成立するわけですから、それも逸したのではないでしょうか。

母親（家族）の下から離れた理由に対しても同様の問題が読み取れます。思い描いていた理想の家族像は、現実とのギャップに打ちのめされ一気に消失してしまいました。体験を通して現実を知り、それまでの理想を思い描くことができなくなりました。

仕事のこと、家族のこと、結婚のことなど、これまで原稿に落とし込んできた彼女の思い描いたことについての現実を知ったのではないでしょうか。そして彼女は、夢や理想を語りにくくなり、原稿が書けなくなったのでしょう。ありのままを書いてもらえれば良かったのでしょうが、今はまだ、ありのままの自分を表出するそのこと自体受け止めきれないのかもしれません。

けれどもこのことは現実に直面し、葛藤する機会に恵まれたということでもあります。今まさに渚さんが、大人としての自立への階段を登る時がきたのだと私は思うのです。「葛藤と向き合う姿勢」とは、対人関係においては、逃げ出すことなく、自分の考えを冷静に相手に伝えること、そして相手の声にもよく耳を傾け、話し合いを通して理解に努めることです。仕事においては、やりがいのない仕事に思えても、心を尽くして一生懸命に取り組むことです。その仕事によって、誰かが喜んでくれ、認めてくれる人が現れます。自身においても働くことによって、生活が成り立っていることを素直に受け止め感謝します。私たちの心の中に不平、不満を感じること自体は悪いことではありません。けれどもそれらの不平や不満がどこに根差しているものなのか、見つめようとすることに意味があります。そして表現方法が変わってくれば、新しい展開が拓けてきます。その実感を通して、自分が変わることの大切さを知ることができます。人はそうやって成長し、人とのつながりも感じられるようになっていくのではないでしょうか。

小さな頃から親から離れて施設で暮らさなければならなかったことや、施設内で友人か

らひどい仕打ちを受けてきたことなどが要因となって、誰も信用できずにずっと孤独に生きてきたとしたら、施設職員として自責の念にかられます。なぜなら、たとえ離別やいじめがあったとしても、決定的な不幸の原因は別にあるからです。それは何をやるにしても、あるいは何をしてもらうにしても不幸としか感じられない心の傾きです。周囲にいた私たち大人は関係者として、「何をしていたのか」と問われることになります。私たちに課せられた使命は大変重要なものだと、今更ながらに痛感させられます。私はこの原稿と向き合うことで、私自身が葛藤する機会に恵まれ、自分自身の未熟さを見つめることができました。私は卒園生や今入所している子どもたちに対し、あるいはこれから出会う子どもたちと向き合う機会を得られる者として、「何ができるのか」という命題を突き付けられていることに気づきました。そしてもっとひたむきに謙虚になりたいと思います。

最後に渚さんにメッセージを届けたいと思います。

“全ての出来事に意味がある。渚さんがよりよい人生を築いていくためのテーマがそこに秘められている。そのことに気付いて前を向いて生きていけば、新たな道がちゃんと準備されている。渚さんが手を差し出してくれるのであれば、私も応援します。私だけでなく心を開くことで、きっと他にも多くの人たちが応援してくれます。そういう人たちに支えられ、どうか渚さんがそれまでの人生経験を通し『この痛みがあったからこそ、こうなれた』と心底思える日が訪れることを願っています。”

上田　翔（２４歳・男性）

＜翔君のこと＞

翔君が小学生のときに母親が再婚しました。継父は中学校を卒業し厳しい調理の仕事に就きました。継父は子どもたちには良い学校に進学して欲しいと思い、厳しく管理しました。門限、家業の手伝い、勉強時間の設定、体力づくりの運動など、守らなければならないことがたくさんありました。守らないときには暴力もふるわれました。翔君は高校に入学し、継父の暴力について担任に相談しました。それをきっかけにして、高校は児童相談所に連絡し、翔君は児童養護施設に入所しました。そして高校を卒業し、施設を退園しました。

6 年前の作文集で、翔君は職員からのインタビューに答えていました。大学受験を控えている時期であり、高校を卒業し施設を巣立っていかなければならない時期でもありました。インタビューでは施設の生活には不満はないと答え、勉強を頑張っていると話していました。翔君は将来の夢を叶えるために大学を卒業しなければならないとも話していました。けれども夢の具体的な内容は語ってはいませんでした。

そして、3 年前の作文集では、福祉系大学に進学することができ、家から通学していましたが、大学３年生の頃、母親と上手くいかなくなって家を出るかもしれないことや、アルバイトで疲れてしまって授業の単位が取れないかもしれないといった相談を職員さんにしていたようです。しかしその後、音信不通となったということが書かれています。

『進路変更大学進学、就職、行き詰まり』

２４歳　上田　翔

工学部系の大学進学を考えて学習してきましたが、計画的な学習ができなくなり、高校の成績が、いまひとつ伸びず、進路変更せざるを得なくなりました。最後まで親のいう国公立大学をねらいましたが、三者懇談会の席で、国公立大学は非常に厳しいと担任から言われ悩みました。親は、あくまで国公立大学を希望していて、私大への切りかえにはなかなか同意してもらえませんでした。大学進学をあきらめ就職も考えましたが、「大学へ行きたい」という思いは強かったので、施設の先生に相談すると、「君は動物が好きだから、警察犬の訓練所、動物園の飼育係、盲導犬訓練所など、まったく異なった世界を考えてはどうか」と助言がありました。それから関係する本などを読みました。また盲導犬協会を訪ねて話を聞きました。そこで大学は出た方がよいと言われ、盲導犬の訓練士は非常に狭き門だが卒業後に挑戦してみて欲しいと背中をおされ、福祉系の大学への進学を決めました。

福祉系の大学への進学を親に告げると賛成してくれました。大学入学金、授業料は親が出してくれることになりました。

福祉系の大学に合格し、親元から通学していましたが、遠くて大変でしたので、学校の近

くのアパートを借りて生活することにしました。「勉強、サークル活動、時々は家に顔を出す」ことがお金を出す条件でした。アパートを借り、自活するようになると生活費を稼がなければならなくなり、親に顔を見せるのが、どんどん遠のきました。そうしたら親から授業料が入らなくなり、生活費と授業料のための仕事が忙しくなり、授業に出られなくなりました。そこで奨学金を借りて授業料にあてることにしました。大学で卒業論文やサークル活動で取り組んでいた障害者支援の道へと進路を決め、障害者の授産施設に就職しました。大学で学んだことを生かせる仕事だと燃えました。しかし現実は非常勤職員としての採用であり、生活するのがやっとでした。そのためバイトもしなければ収入が足りない現実にぶつかりました。同時に、仕事の中で本当に障害者一人一人を大切に、その人に合った支援をしているのか疑問に思うようになりました。３ヶ月頑張ってみて、職場の人間関係も仕事の内容も改善される見通しがもてず、先輩が次々に退職していくのも見ました。自分も意欲がなくなり、うつ状態になり６ヶ月で退職しました。気持ちの整理がつかないまま、生活のためのアルバイトをしていました。その間、友人とのつきあいも、施設への出入りもなくなっていきました。心の整理がつき、再び仕事を探しました。やはり、障害者の授産施設とグループホームをやっている法人に就職しました。正職員として採用され、もうすぐ２年になります。人間関係、仕事内容は以前の職場とあまりかわりません。先輩の退職、障害者個々にあった自立支援の課題といったことは、ここでも同じように壁にぶつかっています。それでもこの仕事に就いたのだから、もう少し続けてみたいと考えるようになりました。

元職員　工藤光一

「やっと連絡がとれたね。何度も電話を入れたぞ。なんで出ない。心配していたよ」と声をかけた。「先生、電話番号、変えたやろう。誰からかわからんから出なかったんだ」と、懐かしい声が返ってきました。

ファミリーレストランで久しぶりの再会になりました。昼食を取りながら、「何年ぶりかな、大学の卒業式から会ってないなあ。どうしてた？　施設にも顔出してなかっただろう。本当に心配してたよ。親元へは帰っているの？」「あんまり帰っていない」「そうか。今、アパート暮らしか？」「うん」「給料が安かったから仕事を辞めたと聞いたが、本当か？」「辞めたのは本当だけど、お金が安いからではないよ」と言った後、辞めた理由を話し始めました。理想と現実のギャップの大きさ、障害者一人一人にあった支援になっていないこと、障害者の人たちが下請けの低賃金で働かされていること、その人にあった仕事かどうかといった疑問を先輩にぶつけてみても「自分でやったら」と流されてしまい、一緒に改善できなかったこと、先輩の退職があとをたたないことなど、いろいろ話してくれました。

こういったことは障害者の施設だけではない。児童養護施設でも一人一人を大切にした生活支援がおこなわれている所は少ないのが現実でしょう。私たちも子どもたちの生活を

改善するために真夜中まで仲間と話し合い、次の職員会で話が進むように調整したりして、少しづつ変えていきました。「仲間は、どこかにいる」と信じて、話をしてきました。職員は転職すればよいが、そこにいる生活者は変わりません。理想への道すじは長くけわしいものです。あきらめずに挑戦して欲しいものです。けれどもうつ的になったり、病気になりそうなら、自分の人生を大切にするために退職してもいいです。心のバランスをよく考えて、誰かに話して、一緒に考えられると少しは、心は軽くなる。私は定年まで勤めてきましたが、理想には程遠いことしか出来なかったと思います。自分の趣味ややりたいことも大切にするとよいでしょう。私は好きなことをいっぱいさせてもらいました。こんなことを彼に話しました。私は彼の顔が明るくなった気がしました。また話しにおいで、一緒に考えることは出来るから。知らぬ間に２時間が過ぎていました。

仙田　奈美（３０歳・女性）

＜奈美さんのこと＞

奈美さんが生まれてから両親が離婚しました。その後、母親が仕事中、奈美さんはパチンコ店の職員寮の部屋に閉じ込められていたようです。5 歳になり、自分で鍵を開け、パチンコ店にいる母親を求めて現れるようになり、母親は仕事にならないからという理由により施設に入所しました。また奈美さんは幼いころから「ぜんそく」を患っており、病院への受診も必要な子でした。

6 年前の作文集では、奈美さんが中学校卒業後に施設を退所して就職し、通勤寮で生活しながら仕事を頑張っていたこと、その後はアパートで 1 人暮らしができるようになったことなどを書いてくれました。

『仕事と結婚について』

３０歳　仙田　奈美

私は、中学校を卒業して、縫製工場に就職しました。初めての縫製工場はすぐに倒産しました。次も縫製工場に行きました。しかし、そこは仕事がなくて、すぐにやめなければならなくなりました。次に就職したのは冷凍した鶏肉の加工工場でした。おじさん、おばさんたちにまじって働きました。おじさん、おばさんたちはいろいろ教えてくれました。しかし同じ位の年齢の人がいなくて友だちはできませんでした。みんな親切でしたので、３年間、施設から通って働きました。工場は、寒くて、ぜんそくのある私には、その寒さがからだによくなかったのか、ぜんそくが出るようになったので、辞めさせてもらいました。貯金は貯まりました。それで、これまで育った施設を出て、通勤寮に入りました。通勤寮はいろいろな規則があって、私には仕事が終わっても自由な時間というのがないように思いました。それで通勤寮を出て、アパートでひとり暮しの生活をすることにしました。

施設の先生たちは大変心配しました。「一人で本当にやれるの」と何度も聞かれました。一人で生活するのは大変でした。一人で起きて、食事をして、仕事に行って、洗たくして、一人でテレビを見て、みんな自分でやらないといけないのです。淋しかったです。それでもアパートでの生活は楽しい自由がありました。仕事は、ファッションセンターに就職しました。店長さんが、とてもやさしくいろいろ仕事を教えてくれました。その店長さんが転勤された時は本当に不安でした。次の店長さんも、その次の店長さんもやさしい方だったのでよかったです。店員さんたちも初めから一緒に働いていた人は少なくなりました。私は６年間勤めています。５年目の表彰もいただきました。もう私も 30 才になるので結婚を考えるようになりました。これまで私の部屋に住みついているボーイフレンドがいました。その人との結婚を考えていました。しかし、その人には借金がいっぱいあって、「借金とりから逃げている」と言って、私の部屋に住みついた人です。仕事したり、しなかったりでしたが、今

は仕事がつづいていて、月々わずかですが生活費を入れてくれます。結婚の話になると、はっきりしません。淋しいですが別れることにしました。

職員　鈴木　和夫

奈美さんと私たちの出会いは５才の時でした。お母さんの仕事場の上の部屋で、鍵をかけられて育てられていたようです。自分で鍵をあけて、仕事場に下りてくるようになり、仕事ができないからとの理由で措置されてきたのです。キャラクター絵のついた枕と哺乳びんをもって、紙おむつをして現われました。まったく言葉が出ませんでした。他児のもってるおもちゃが欲しいと、その子から取り上げて泣かしてしまう。押し倒して泣かす。叱ることばかりで目が離せませんでした。言葉を覚えてもらう訓練、ぜんそくでの入退院のつきそい。幼稚園でも、担任の先生の手をやかせ、園長先生の席の横に奈美ちゃんの席が用意されたりしました。面会に来たお母さんが「ことばが出た。この子、話せるの」と言ったのには驚きました。「話せた」「運動会で走った」「授業参観の時、手を上げた」「友だちができた」「１＋１ができた」などなど、彼女は私たちに涙の出るような感動をいっぱいあたえてくれました。小学校の３年生の時、自分から特別支援学級に行きたいと言ってきました。中学校を卒業する時も、私たちは、「高等部」を勧めました。けれども「仕事をする。勉強はきらい」と言ってきました。そういって自分で自分の進路を決めてきました。特別支援学級では、先生の助手的存在となり人前で話したり、書いたりすることに自信がつき、お手紙を書くことが大好きになり、いっぱい実習生などにお手紙を書きました。中学卒業後の奈美ちゃんの船出は大変でした。２つの縫製工場の倒産と人員整理にあいました。それでも次の仕事を施設から通うことで頑張り、18 才で通勤寮に入り、そしてアパートでの自立、自律の道を歩んでいます。その間に、せっかく貯めた預金を、保護者であるからとの理由で取りあげられ、必要だから返して欲しいというと、ほとんど全額使われてしまっていたこともありました。ボーイフレンドに、電化製品を全て持ち逃げされて大変なこともありました。しかし、仕事場の方々に助けられて、６年間も勤めています。そしてボーイフレンドとの別れを決断したようです。自分で決めた、自分の人生。私たちも応援しています。幸せを願って。すてきな、やさしい人との出会いがあることを願っています。

鈴木　あゆみ（３０歳・女性）

＜あゆみさんのこと＞

父親が行方不明、母親が精神病院に入院したため、母方伯母に預けられましたが育てられなくなり１歳３か月のときに乳児院に入りました。その後、児童養護施設に移りました。兄の就学を機に、母親は関係者の反対にも耳を傾けずに子どもたちを引き取りました。あゆみさんの母親は精神的に不安定な人でした。父親との関係は無く、父親に対しての思い出もまったくありません。家にはいつも母方伯母が来ていて、あゆみさんの身の回りの世話等をしてくれていました。けれども１か月も経たないうちに母親は再入院しました。そのためあゆみさんは再び施設で生活することになりました。

６年前の作文集では、小学生の頃は大きい子に理不尽なことを要求されたり、使い走りさせられたりと施設の生活は苦痛だったこと、学校が天国のようだったと、述懐しています。中学校に入学してからは、今まで我慢しながら生活していた反動からなのでしょうか、悪い事等に興味を持つようになり、反社会的行動をするようになりました。その後、高校に進学したのですが、非行を繰り返し、高校を退学しました。数ヶ月後、美容院の住込みの仕事を見つけ、施設を退所しました。仕事を始めたのですが、無断欠勤が続き、結局仕事を辞めてしまいました。その後、生活は荒れ、薬物にも手を出すようになってしまいました。夜の商売に身を任せたあゆみさんは、覚醒剤所持で警察に逮捕され、少年院に入院しました。出院後、友人の紹介で知り合った男性と結婚し、子どもが産まれました。子どもに対してとても愛おしく思うこの気持ちを、あゆみさんの母親もきっと思っていたのだろうと思えるようになったと書いています。

そして、3 年前の作文集では度重なる夫からの暴力と逮捕により二人目の子どもを妊娠中に離婚をしたこと、その後は無事に第二子を出産し、いろいろな人に支えられながらシングルマザーとなって子育てと仕事を頑張っていることが書かれています。

『あれから・・・』

３０歳　鈴木　あゆみ

２人目を妊娠中に旦那と離婚しました。頼る所がない私にとって、住居の問題はとても大きな問題でした。妊娠している私を雇ってくれる所もなく、本当に生活に困りました。どうにもこうにもいかない状況でしたので、役所に相談し、生活保護の申請と、母子生活支援施設に入る手続きを取りました。子どもだけ施設に預かってもらう選択肢もありましたが、子どもと離れることは絶対に嫌だったので、母子生活支援施設に入ることを決めました。２人目を無事に出産し、女の子に恵まれましたが、早く母子生活支援施設を出て、自活したかった私は、何度も母子生活支援施設から退所したい気持ちを、職員さんたちに相談しました。焦る私に、職員の方々は、何度も「生活を整えてから退所した方が良い」と、アドバイスしてくれました。また、しばらく生活保護を貰っていたのですが、なんだか心苦しく、早く自

分で働いて自立した生活を送りたいと思っていました。

産後の体調も落ち着いた頃から、短時間のバイトを始めました。子どもも保育園に預かってもらい、少しずつ生活を整えていきました。母子生活支援施設での生活は多少の不自由さはありましたが、母子生活支援施設に入ったおかげで、無事に出産でき、生活する場所がもてたことは、本当にありがたいことだったと思っています。保育園の迎えに行けない時は、職員さんが代わりに迎えに行ってくれる時もありました。子どもの事で悩んだときには、保育園の先生や施設の担当の職員さんたちに相談したりしていました。本当にいろんな人に助けられたと思っています。

その後、自分で生活する目途もたったので、母子生活支援施設から退所しました。少年院で取得した資格を活かし、事務の仕事に就くことが出来、生活保護を貰わずに何とか生活しています。母子生活支援施設から出た後も、友人らがいろんな場面で助けてくれ、本当に助かりました。子どもも上の子は小学 2 年生、下の子は 5 歳になりました。子どもはいろんな表現をするので、子育てに悩む事もありますが、施設の先生やママ友、昔施設で一緒だった仲間らに相談しながら育てています。これからも、親子三人で仲良く暮らしていきたいと思っています。

『６年目の成長記録』

職員　村山　明日香

第二子が誕生後、しばらく母子生活支援施設で生活していたあゆみさんから、近況を知らせる電話が何度となくありました。母子生活支援施設の生活は、自由奔放にくらしていたあゆみさんには少々辛い面もあったようで、何度か退所したい気持ちを訴えてくる事がありました。二人の子どもを抱える身であるため、性急な判断をしないようアドバイスをしたことが思い出されます。施設に子どもを預けるか、母子生活支援施設に入るかの選択の際、迷わずに母子生活支援施設を選んだ彼女ですから、不満は言いつつも、短絡的な行動を取ることはありませんでした。

生活が整うまで母子生活支援施設にお世話になったあゆみさんですが、入所中は、職員の方にとてもお世話になったようです。私に掛けてくる電話の訴えを、日常的に職員の方に訴えていたことが想像されますが、彼女の気持ちに共感しながらも、生活の目処が立つまでしっかりと一家を支え、指導して下さっていました。その甲斐あって、やっと母子生活支援施設から退所し、新しい生活を始めることができるようになりました。

母子生活支援施設から退所後、仕事の面で色々苦労もあったようですが、そこは負けず嫌いのあゆみさん。子どもたちを養うために一生懸命頑張っていました。少年院で取得した資格を活かして、事務仕事に就き、家事と育児もこなすパワフルウーマンに変身しました。今は、子どもに習い事もさせるなど余裕もでき、子どもの教育にも熱心な様子です。子どもの習い事の様子など、色々教えてくれますが、親ばか発言連発で、思わず突っ込みたくなりま

すが、そんな自慢話ができるまでになったことに、こちらも嬉しい気持ちになります。また、子どもを通じて知り合ったママ友とも、いい感じでお付き合い出来ているようで、人間関係も広がったようです。日々を楽しそうに過ごしている様子を聞くと、「良かったなぁ・・。」と心から思います。再婚の意志を訊いてみることもありますが、ニュースで流れる連れ子への虐待問題が引っ掛かるようで、なかなか一歩を踏み出せない様です。いつだって、子どものことを一番に考えるあゆみさんらしい心配事ですが、彼女を支え、子どものことも大事にしてくれる男性とご縁があるなら、その縁を掴んで欲しいと思っていますが、どうなることやら・・。

ともあれ、彼女たち一家が、これからも健康で、明るく、元気に暮らしていけることを願い、また、たまにかかってくる子どもの自慢話に耳を傾け、時には、子育てのアドバイスもしながら、今後も関わっていきたいと思っています。

深津　俊哉（４８歳・男性）

＜俊哉さんのこと＞

2歳の頃、児童養護施設に入所しましたが、入所理由はよくわかっていません。俊哉さんは小学生の頃は野球少年でした。高等技能専門校を卒業後、建具屋に就職し、同じ職場で働き続けています。社長夫妻、入所していた施設の職員等に支えられながら、地域の一員として活動しています。

6年前の作文集で、施設の生活では上級生から下級生に対して無理な命令など頻繁にあり、居心地のよい場所とは言えないこともあったと述べています。けれども職員も含めて一緒に生活する大きな家族のようでもあったと振り返っています。施設を退所して建具屋に就職し、ずっと同じところで仕事を続けて20年以上になります。まじめに仕事をして

きたことで信用もされ、職場の親方に保証人になってもらったりしました。施設を退所してからいろいろなことがあったけれど「負けてたまるかという気持ちと、周りの人との関係を大切にすること」を心がけてきたことが書かれていました。

そして、3 年前の作文集では施設の卒園生たちで野球チームを結成し、22 年目になった現在も続いていること、そのメンバーとは家族ぐるみのお付き合いをして楽しい時間を過ごしていることを書いてくれました。また地域のソフトボール協会に加入して、町の行事やソフトボールの運営などを通じて地域の人たちのとのつながりを感じ、充実した日々を送っていることを書いてくれました。

『これからもこれまでと変わりなく』

深津　俊哉

私は建具屋をしています。最近は本当に忙しく、工場と現場の往復が続いています。工場で作った商品（建具・家具）を新築の家が立ち並ぶ現場まで運び、ひたすら取り付ける作業に追われています。朝から夜遅くまでこの作業が続いていますので、毎日くたくたになり、自宅に戻りますが、あまり景気が良くないなか、ほんとうに有難いことで、今年度の終わりまで仕事が途切れない状況です。

この作文のこともずっと前から聞いていましたが、仕事がこんな状況であることと、唯一の休みにも卒園生で結成した野球チームの試合が入っていますので、なかなか木股さん（施設職員）と会う時間がありませんでした。

先日は急に雨が降って午後の試合が中止になりました。直後に木股さんから電話をもらったので、久しぶりに施設に顔を出してきました。結構遅くまで、昔の色んな話をしてきました。まだ前回の作文から三年しか経っていませんし、私の生活もほとんど変わりませんが、これまで話してないことがありましたので、今回はそのことについて書くことにします。

実は 31 才のとき、ガンになりました。木股さんもそのことは知っています。先日会った時もその話をしていました。自分で言うのもなんですが、よく完治したなぁと思います。退院後も再発することなく、退院後の 12 年目の最後の検診の最後に、「もう来なくていいよ」と主治医に言われてから、今は薬も飲んでいません。年に一度、職場の健康診断を受けているだけです。

24 才の時でした。時々胃の調子が悪くなるんです。自分でも大丈夫なのかなぁとは思っていたんですが、病院の検査には引っかかりませんでした。その日は町内のグラウンドでソフトボールの試合をしていました。ヒットを打ち一塁に向かう途中でした。今までに感じたことの無いくらいの痛みでその場に倒れたのを覚えています。すぐにメンバーが病院に運んでくれましたが、即入院となりました。

結局、胃を全部取りました。未だに食事もほんの少しずつしか食べることができません。野球チームの忘年会で注文したサトイモ 1 個を食べるのに 1 時間かかり、一緒に居たメン

バーの驚いた顔を思い出しました。タコやイカ、こんにゃくなどは消化しないので、少し大きなかたまりを食べるとすぐ腸に詰まってしまいます。詰まると本当に大変なんです。猛烈な痛みのまま即入院となり、1週間も点滴が続くことになります。3日目からは多少動けるようになりますが、まだ痛くて立っていることができないので、モルヒネを打ってもらいます。こんな不自由もありますが、それ以外では生活に支障を感じることはありません。

以前にお話ししましたが、卒園生で結成した野球チームはまだ続いています。その試合が日曜日にあります。それと地元で新しくソフトボールチームを作り、仕事が終わってからナイターで試合をやっています。あとは町のソフトボール協会の副理事にもならせてもらっています。聞こえは良いのですが、試合のテント張りやグラウンドのコンディションチェックなど、ほとんどが裏方で割に合わない役目です。

仕事は32年目を迎えています。17才で就職してからずっと同じ所で勤めています。工場で働いているのは社長と社長の奥さん、それと私の3人だけです。社長の子どもは後を継いでいませんので、10 年くらい経てば社長も引退し工場は閉鎖になるでしょうが、腕の良い職人は減っていますし、私はまだまだ働けますので他の工務店に行くつもりにしています。

私の人生の目的は建具屋になることではありませんでした。施設で始めたソフトボールをずっと続け、いつかもっとレベルの高いチームに入り、上を目指してやってみたいという夢がありました。途中、病気もしましたが、好きなソフトボールだけは一生懸命続けてきた思いがあります。企業クラブや地区クラブには入っていない私でしたが、そんな人たちに交じって 31 才から 36 才までの 5 年間は、県選抜に選ばれることができました。国体を目指し東海大会まで進んだこともありました。自分の中でのとても充実した日々でした。そのような場所でやれたことが誇りであり自信になっているのは確かです。

私の生活は野球（ソフトボール）抜きには考えられません。そこで関わらせていただいた多くの方々との縁をこれまでずっと大切にしてきました。その人たちに支えられ、またその人たちから別の縁をもらい、今の生活があるんだなぁと思っています。